

## 2 . 教育学部・教育学研究科

教育学部・教育学研究科の研究目的と特徴	・・・	2 - 2	
分析項目ごとの水準の判断	・・・・・・・・・・・・・・・・	2 - 3	
分析項目	研究活動の状況	・・・・・・・・・・・・・・・・	2 - 3
分析項目	研究成果の状況	・・・・・・・・・・・・・・・・	2 - 12
質の向上度の判断	・・・・・・・・・・・・・・・・	2 - 20	

## 教育学部・教育学研究科の研究目的と特徴

- 1 教育学部・教育学研究科は、本学の基本的な目標とする「人と自然・人と社会の科学を先鋭に営むこと及び社会の要請に応え、地域文化の向上、地域課題の解決に貢献すること」と関連し、教員養成に関わる高度な学術研究の中核としての機能を高めることを目指し、多様な教育課題に関する創造的な学術研究を積極的に推進すると共に、人間・社会・自然に関する諸科学を総合的に深化させ、学際的な教育研究の場を創出することにより、学校教育及び地域社会の発展に寄与することを研究目的としている。
- 2 この目的を達成するため、教育及び教育実践の研究推進、外部研究資金の確保、研究成果の適切な評価、地域の教育・文化の発展への貢献を中期目標として設定している。
- 3 上記の目的を達成するため、教育学部研究活動推進委員会の下に、教職・心理系、文系、理系、スポーツ・芸術系、特別支援・養教系の各学系の専門分野によって構成される研究体制（教員総数 105 名）を設けている。
- 4 教員養成に関わる研究としては、教育方法、教育制度、カリキュラム開発、教材開発、教育臨床、教科指導等に関する理論的・学術的な研究、地域の教育現場と連携した実践的な研究、教員養成及び学校教育が抱える諸課題の改善・解決に向けた研究を推進する。
- 5 新課程（生涯スポーツ福祉課程・地域共生社会課程）に関わる研究としては、福祉、介護、スポーツ等の分野に関する総合的な研究、現代社会の抱える高齢化、少子化、青少年犯罪、多文化接触等の現代的な諸課題に関する創造的な学術研究を推進する。
- 6 多様な教育課題を研究対象とする本学部・研究科にとっては、文部科学省によって採択された二つの教育 GP に基づく活動・成果は、研究活動としても位置づけられる。

### [ 想定する関係者とその期待 ]

以上の目的・特徴に照らして、教育学部・教育学研究科では、県・市町村教育委員会、学校現場等の関係者を想定し、教育委員会からは学校教員としての実践的指導力の向上、学校現場からは今日的教育課題の改善・解決という期待を受けている。

## 分析項目ごとの水準の判断

## 分析項目 研究活動の状況

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 研究活動の実施状況

## (観点に係る状況)

論文・著書等の刊行や研究発表の状況(資料1-A)及びスポーツ・芸術系教員の研究活動状況(資料1-A)は活発であり、件数は増加傾向にある。また、研究発表等の場合は国内外を問わず多岐にわたっている(資料1-B)。

科学研究費補助金受入は件数・金額ともに大幅に増加している(平成15年度に比べ平成19年度は件数で138.5%増、金額で41.0%増)(資料1-C)。その他の競争的外部資金受入状況は平成17年度以降活発となったが、教員養成GP及び現代GPの採択によるものである(資料1-D)。寄附金、共同研究・受託研究の状況は、資料1-E～資料1-Gのとおりであり、特に寄附金には、情報教育の進展に関心を持つ大手企業からのものなどが含まれる一方、共同研究には、「海藻類を活用した生理活性素材開発並びにバイオマスの効率処理技術の確立に関する研究」など地域のニーズに即したものがあり、注目されている。

教員養成に関わる高度な学術研究の中核としての機能を高めるため、社会、経済、文化面で重点を置く研究活動として、多様な教育課題に関する創造的な学術研究を積極的に推進している(資料1-H)。研究課題は、日本の学校教育やそこでの教育内容・方法に関するものから、教育に関わる地域連携や国際協力に関するものまで、幅広い。また、学部・研究科をあげた取組みとして、教員養成カリキュラム開発及び学校教育の課題解決を目的とする二つのGPを推進しており、個別研究にもこれと有機的に関連したものが見られるのが本学部・研究科の大きな特徴である(資料1-I-1、資料1-I-2)。

これ以外に、学術面で重点を置く創造的研究活動として、人間・社会・自然の諸科学を深化させる研究活動を積極的に推進し、学際的な教育研究活動の場を創出している(資料1-J)。

また、学校教育及び地域社会の発展に寄与するため、学校教諭等が参加する研究会・シンポジウム・ワークショップや、研究成果を広く社会に還元するための公開講座・演奏会・展示会等を多数開催している(資料1-K)。中でも、毎年多数の参加者を集める附属小・中学校の研究発表会は、学部と附属の共同研究の成果発表の場となっている。また、特別支援教育に関する公開講座やライフスキル教育ワークショップには、ここ数年100名以上の参加者がある。学校教諭向けの講演・指導助言も活発で、県内の研究指定校や授業研究会での講演・指導助言は、要請に応じ随時行われており、1人で年間30件近くの依頼に応じている教員も存在する。非常勤講師、国・地方自治体の委員等への応嘱件数も多く(平成16年:169件、平成17年:155件)、教育研究を通しての社会貢献は極めて活発である。

資料 1 - A 著書・論文・発表等の件数（出典：教育学部内調査に基づき作成）

年度	著書	紀要	学術雑誌		学術講演・シンポジウム等発表件数		翻訳書等 (その他)	合計
			日本語	外国語	国内	国際		
平成 16 年度	23	54	49	21	104	22	45	318
平成 17 年度	31	51	48	40	123	19	65	377
平成 18 年度	27	56	45	31	122	24	81	386
平成 19 年度	29	70	56	34	131	32	54	406
合計	110	231	198	126	480	97	245	1,487

資料 1 - A スポーツ・芸術活動等の件数（出典：教育学部内調査に基づき作成）

年度	芸術作品・演奏		スポーツ活動		合計
	国内	国際	国内	国際	
平成 16 年度	17	5	3	0	25
平成 17 年度	27	2	3	1	33
平成 18 年度	23	2	4	0	29
平成 19 年度	27	5	4	0	36
合計	94	14	14	1	123

## 資料 1 - B 主要な研究発表等の場（学系別に例示）

（出典：教育学部内調査に基づき作成）

教職・心理系	
日本教育学会	日本教育心理学会
九州教育学会	日本社会心理学会
日本社会教育学会	日本心理臨床学会
日本公民館学会	International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (IACAPAP)
日本心理学会	
日本発達心理学会	
文系	
日本国語教育学会	日本地理学会
全国大学国語教育学会	International Medieval Congress (Leeds, UK)
日本近代文学会	日本生活体験学習学会
日本史研究会	全国語学教育学会 (JALT)
西洋史研究会	日本語用論学会
理系	
日本数学教育学会	日本産業技術教育学会
日本数学会	電気学会
日本理科教育学会	International Union of Forest Products Association (IUFRO)
日本物理学会	
日本分析化学会	日本家庭科教育学会
Asian Conference on Analytical Sciences	日本家政学会
European Geosciences Union (EGU)	日本建築学会
スポーツ・芸術系	
日本音楽表現学会	日本体育学会
N 響 Music Tomorrow	日本運動生理学会
アジア音楽祭	International Conference of Biochemistry of Exercise
アジア基礎造形連合学会	
モダンアート展（東京都立美術館等）	Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science (APCESS)
国際写真家協会公募展	
日本伝統工芸展	日本武道学会
特別支援・養教系	
日本特殊教育学会	日本学校保健学会
Council for Exceptional Children	日本養護教諭教育学会
Asia-Pacific Congress on Deafness	日本看護研究学会

資料 1 - C 科学研究費補助金（出典：全学保有データを基に作成）

年度	研究種目	申請 件数	内定 件数	内定金額(千円)	間接経費(千円)
平成 16 年度	科学研究費補助金	44	16	25,082	0
	特別研究員奨励費	0	0	0	0
平成 17 年度	科学研究費補助金	97	27	37,500	300
	特別研究員奨励費	0	1	1,200	0
平成 18 年度	科学研究費補助金	72	33	40,700	400
	特別研究員奨励費	1	1	500	0
平成 19 年度	科学研究費補助金	74	33	34,453	700
	特別研究員奨励費	0	0	0	0

資料 1 - D 競争的外部資金（出典：全学保有データを基に作成）

年度	競争的外部資金区分	採択 件数	受入金額(千円)	間接経費(千円)
平成 16 年度	政府の助成金（文部科学省）	0	0	0
平成 17 年度	政府の助成金（文部科学省）	1	18,909	0
平成 18 年度	政府の助成金（文部科学省）	2	40,508	0
平成 19 年度	政府の助成金（文部科学省）	1	23,400	0

資料 1 - E 寄附金（出典：全学保有データを基に作成）

年度	受入件数	受入金額(千円)
平成 16 年度	13	12,615
平成 17 年度	16	15,348
平成 18 年度	8	3,946
平成 19 年度	7	4,726

資料 1 - F 共同研究の実施状況（出典：全学保有データを基に作成）

年度	受入件数	受入金額(千円)	共同研究員受入人数
平成 16 年度	1	0	0
平成 17 年度	3	520	1
平成 18 年度	2	300	1
平成 19 年度	0	0	0

資料 1 - G 受託研究の実施状況（出典：全学保有データを基に作成）

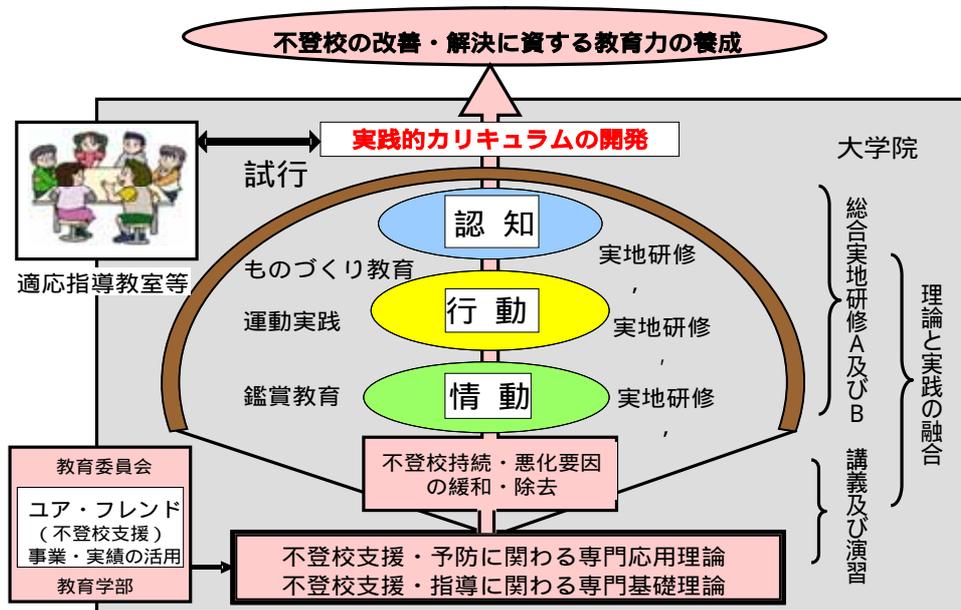
年度	受入件数	受入金額(千円)
平成 16 年度	1	27,265
平成 17 年度	1	26,572
平成 18 年度	1	700
平成 19 年度	1	700

## 資料 1 - H 多様な教育課題に関する創造的な学術研究

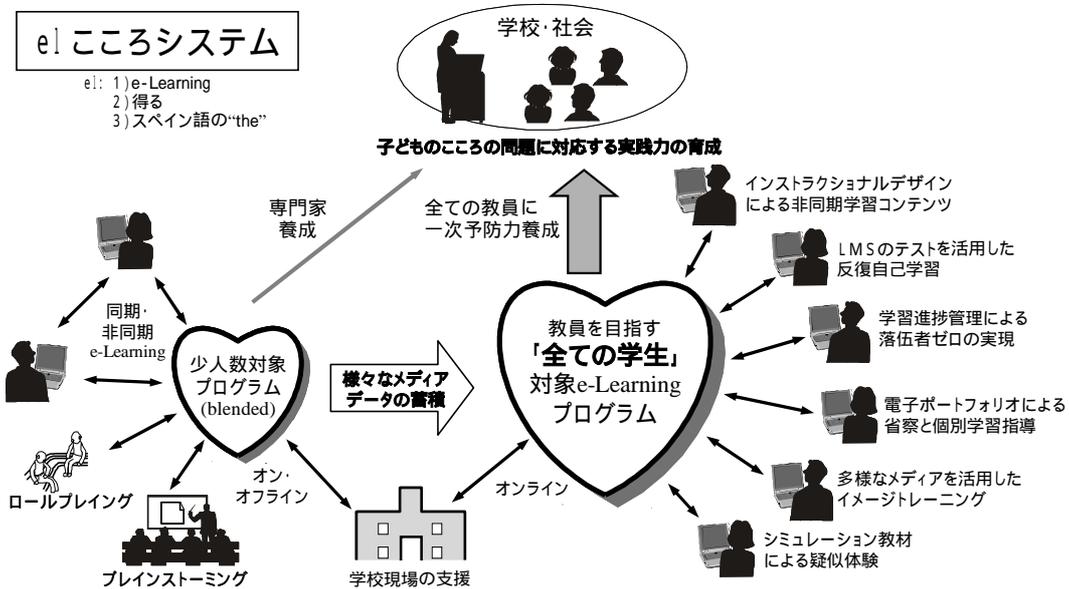
( 出典：熊本大学 Web ページ、平成 16-18 年度採択課題から抜粋 )

G P
不登校の改善・解決に資する教育力の養成 - 大学院教育における系統的カリキュラムの創出と試行実践 - eI こころ学習プログラムの開発 - 教員志望のすべての学生にこころの健康一次予防力を養成する e-Learning Program の開発 -
教職・心理系
地域学校ガバナンス改革の教育法社会学的考察 西日本の事例に即して ( 基盤(C) )
幼児の対話的自己を育てるための葛藤解決訓練プログラムの開発 ( 基盤(C) )
協同構成課題における思考と動作のリズム特性と認知 情動の影響過程に関する実証研究 ( 基盤(C) )
戦後沖縄の郷友会形成過程と地域の共同性に関する社会教育的研究 ( 若手(B) )
文系
入門期のコミュニケーションの形成過程と言語の発達に関する実証的実践的研究 ( 基盤(C) )
社会科教育における地域資源と情報ネットワークの有効活用による教育システムの開発 ( 基盤(C) )
理系
地球の裏側から夜空を!初の海外インターネット天文台により変わる日本の理科教育 ( 基盤(B) )
算数・数学科における「本質的学習環境」の開発に関する生命論的研究 ( 基盤(C) )
校内資源を活用したエネルギー・環境の生物分野カリキュラム開発 ( 基盤(C) )
環境問題に着目した義務教育課程におけるパワーエレクトロニクス教育実践 ( 基盤(C) )
ものづくり教育による不登校児童生徒の教育支援プログラムの開発 ( 基盤(C) )
ものづくり教育を中心とした交流学習型・地域連携型の「総合演習」カリキュラムの開発 ( 基盤(C) )
産学官連携による交流学習型・地域連携型の「総合演習」カリキュラムの開発 ( 基盤(C) )
作る喜びを中核にして合教科的に取り組む“総合的な学習の時間”の実践研究 ( 基盤(C) )
九州・沖縄の「生活課題」「生活文化」にかかわる家庭科の授業研究 ( 基盤(C) )
東京女子高等師範学校における家政学教育の展開と専門職意識の形成 ( 基盤(C) )
スポーツ・芸術系
ICT を活用した美術教育の研究 不登校対策とユビキタス社会へ向けての実践 ( 基盤(C) )
総合的学習のための表現教育の教材開発研究 ( 基盤(C) )
運動教育としてのリズム体操における心理的効果と運動の発達過程との関連 ( 基盤(C) )
地域で生活する障害者のスポーツ活動の場としての総合型地域スポーツクラブのあり方 ( 基盤(C) )
特別支援・養教系
特別支援教育を担う教師のトレーニングプログラム開発に関する研究 ( 基盤(B) )
養護学校の学校評価システムと学校マネジメント研修に関する実際研究 ( 基盤(B) )
スリランカにおけるインクルーシブ教育を組みこんだ初中等教育教員養成モデルの構築 ( 基盤(B) )
社会資源過少地域における就学前障害児支援システム構築に関する実践的研究 ( 基盤(C) )
高機能広汎性発達障害児・者への生涯発達支援に関する臨床的研究 ( 基盤(C) )

資料 1 - I - 1 教員養成 GP「不登校の改善・解決に資する教育力の養成」の取組概要  
 (出典：大学・大学院における教員養成推進プログラム(教員養成 GP)不登校の改善・  
 解決に資する教育力の養成報告書、平成 19 年 3 月より抜粋)



資料 1 - I - 2 現代 GP「e!こころ学習プログラムの開発」の取組概要  
 (出典：平成 18 年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム報告書より抜粋)



## 資料 1 - J 人間・社会・自然の諸科学を深化させる研究活動

(出典：熊本大学 Web ページ情報、平成 16-18 年度採択課題から例示)

文系
中世ブリティッシュ・ヒストリーの可能性と射程 (基盤(B))
11 世紀から 13 世紀のイングランドにおけるジェントリの州共同体の社会と構造 (基盤(C))
日本中世生業史の研究 「農業/非農業」の二項対立論を超えて (基盤(C))
清代中央官制の研究-内閣 翰林院・都察院を中心として (基盤(C))
条件不利地域におけるデジタル・デバイド対策と地域再生システムの開発研究 (基盤(C))
鎌倉時代の古記録に於ける記録語・記録語法の研究 (基盤(C))
ラフカディオ・ハーンの英語添削乾板の判読、復元 (基盤(C))
英語の形態論、意味論・語用論研究と辞書学にもとづく「英語接辞辞典」の作成 (基盤(C))
中・東欧における法専門職の近代化過程に関する研究 (萌芽)
生命誕生をめぐる「語り」と道徳的思考 「不当な生」とその周辺事例を中心に (萌芽)
理系
アフィン型相対差集合の研究 (基盤(C))
最小跡の総合的研究 (基盤(C))
リーマン幾何と離散幾何との関連の最小性の観点からの研究 (基盤(C))
阿蘇火山中岳火口付近の有史における火山災害と噴火様式の実態解明 (基盤(C))
木星オーロラの起源の解明 ユリシーズの木星再訪を捉える (基盤(C))
ラット骨格筋線維タイプとサイズの変化に対するアポトーシス関連タンパク質の影響 (基盤(C))
骨格筋の肥大・萎縮における熱ショックタンパク質とカルシニューリンの関連 (基盤(C))
重点領域研究 (拠点形成研究) 等への参加
世界的文化資源集積と文化資源科学の構築 (拠点形成(B))
脱近代社会の秩序形成の原理と政策に関する研究 (拠点形成(B))
生命倫理を中心とする現代社会研究 (拠点形成(B))
地域連携によるキャリアパス環境整備 (科学技術振興調整費)

## 資料 1 - K 研究会・シンポジウム・ワークショップ・演奏会・展示会等

(出典：教育学部内調査に基づき作成)

GP 関連
不登校の改善・解決に資する教育力の養成に関するシンポジウム (対象：学校教諭・保護者)
心の健康教育講演会とワークショップ 全ての教員に一次予防力を (対象：大学教員、学校教諭)
教職・心理系
日中教師教育国際シンポジウムの企画・運営 (対象：教員養成系大学教員)
九州民間教育研究団体連絡協議会の企画・運営 (対象：学校教諭・保護者)
熊本県「大学と連携した接続期の研究」連絡協議会での助言指導 (対象：学校教諭・教育委員会)
熊大サマースクール「学校管理職講座」 (対象：学校管理職)
公開講座「カウンセリング講座」 (対象：学校教諭・保育士・適応指導員)
公開講座「リーダーシップ・トレーニング」 (対象：組織・団体のリーダー)
文系
日本語教育学会全国大会での公開授業 (対象：学校教諭・一般)
熊本県中学校国語科教育研究大会での指導助言 (対象：学校教諭)
熊本県小学校国語科教育研究大会での指導助言 (対象：学校教諭)
シンポジウム「中世ブリテン島の歴史的諸相」(連続する 5 つの国際シンポジウム)の企画・運営 (対象：歴史研究者)
九州ウェブサイト大賞審査委員長 (対象：一般)

九州英語教育研究大会での指導助言（対象：学校教諭）
スーパー・イングリッシュ・ラングー 130ジ・ハイスクール（SELHi）の運営・指導（対象：学校教諭）
英語授業学研究会 PIGATE（ピガティ）の運営・指導（対象：学校教諭）
理系
International Workshop for Designing the Substantial Learning Environments in Kumamoto の企画・運営（対象：学校教諭）
算数・数学の学習環境デザインワークショップの企画・運営（対象：学校教諭）
青少年のための科学の祭典の企画・運営（対象：小学生～高校生・学校教諭・一般）
「産業技術教育」のための国際教育協力シンポジウムの開催（対象：産業技術教育関係者）
全国中学生ものづくり競技大会審査員（対象：中学生）
熊本県ものづくりフェアの企画・運営（対象：小中学生・学校教諭・保護者）
熊本県中学校ロボットコンテスト審査員（対象：中学生・学校教諭・保護者）
情報教育研究会の運営・指導（対象：学校教諭・一般）
九州地区中学校技術・家庭科教育研究大会での指導助言（対象：技術・学校教諭）
九州地区小学校家庭科教育研究大会での指導助言（対象：学校教諭）
熊本県中学校技術・家庭科教育研究大会での指導助言（対象：学校教諭）
熊本県小学校家庭科教育研究大会での指導助言（対象：学校教諭）
スポーツ・芸術系
N響 Music Tomorrow での委嘱作品「地上の平和」初演（対象：一般）
日本大学カザルスホールでのピアノ・リサイタル（対象：一般）
全日本ピアノ指導者協会主催コンペティション審査員（対象：ピアノ学習者）
全国高校文化祭・音楽（合唱）審査員（対象：高校生）
九州高校音楽コンクール審査員（対象：高校生・学校教諭）
九州合唱音楽コンクール審査員（対象：中学生～大学生・学校教諭・一般）
国際交流作品展（韓国）での作品展示（対象：一般）
日本伝統工芸展での作品展示（対象：一般）
モダンアート展（東京都立美術館等）での作品展示（対象：一般）
全国図画工作・美術教育研究大会での指導助言（対象：学校教諭）
熊本県図画工作・美術教育研究大会での指導助言（対象：学校教諭）
文部科学省委託『子どもの体力向上実践事業』指定校での指導（対象：学校教諭・教育委員会）
熊本県体力・運動能力調査報告書作成（対象：教育委員会）
全国教員柔道大会での指導（対象：学校教諭）
全日本学生柔道優勝大会での指導（対象：学生）
ライフスキル教育ワークショップ（対象：学校教諭）
特別支援・養教系
Teacher Training Towards Inclusive Education: Sri Lanka-Japan Research Conference の企画・運営（対象：教員）
公開講座「障害児教育の教育実践的課題」（対象：特別支援教育関係者）
公開講座「特別支援教育・はじめの一步」（対象：特別支援教育関係者）
公開講座「特別支援教育・Step by Step」（対象：特別支援教育関係者）
日本学校保健学会でのワークショップ「養護教諭のためのフィジカルアセスメントの実際」（対象：学校教諭）
附属学校園関係
熊本大学教育学部附属小学校研究発表会での指導助言（対象：学校教諭）
熊本大学教育学部附属中学校研究発表会での指導助言（対象：学校教諭）
熊本大学教育学部附属特別支援学校研究発表会での指導助言（対象：学校教諭）
熊本大学教育学部附属幼稚園研究発表会での指導助言（対象：学校教諭）

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

第一に、科学研究費補助金受入が大幅に増加している。その他の競争的外部資金の受入も良好で、学部を挙げた取組みにより教員養成 GP 及び現代 GP が採択され、これに関連する個別研究がさらに活性化するというプラスの相乗効果が生じている。

第二に、社会、経済、文化面で重点を置く研究活動として、「不登校の改善・解決に資する教育力の養成」(教員養成 GP)、「e1 ころころ学習プログラムの開発」(現代 GP)、「特別支援教育を担う教師のトレーニングプログラム開発に関する研究」など、多様な教育課題に関する創造的な学術研究が積極的かつ組織的に推進されている。

第三に、学術面で重点を置く研究活動として、研究者の国際交流や研究拠点形成の意味を持つ「中世ブリティッシュ・ヒストリーの可能性と射程」や、海外において高評価を得ている「リーマン幾何と離散幾何との関連の最小性の観点からの研究」など、人間・社会・自然の諸科学を総合的に深化させる研究活動が積極的に推進され、学際的な教育研究活動の場が創出されている。

以上のことから、本学教育学部・教育学研究科における研究活動の状況は、期待される水準を大きく上回るものと判断される。

## 分析項目 研究成果の状況

## (1) 観点ごとの分析

## 観点 研究成果の状況

(観点到係る状況)

教育学部・教育学研究科では、研究活動推進委員会を中心とした学部全体での研究推進の取組により、社会、経済、文化面でも、それ以外の学術面でも優れた研究業績が多数生み出されている。その多くは、教員養成に関わる高度な学術研究の中核としての機能を高めるといふ学部・研究科の目的にふさわしく、多様な教育課題に関する学術研究の成果である。

本学部・研究科の研究目的に合致した代表的な業績を、全学的判断基準(資料2-A、B)に基づいて選定し、SSとSに分類した(資料2-F)。

社会、経済、文化面における優れた研究業績としては、現代の多様な教育課題についての創造的な学術研究の成果をあげることができる(資料2-C)。そこには、二つのGPに代表されるように、シンポジウムやワークショップ等を通じた組織的な情報提供により、学校教諭や児童・生徒の保護者など広い範囲の教育関係者に対し非常に有益な知識や技術を提供しているものが含まれる。また、個別研究の中には、地域社会や途上国の教育問題を取り扱った優れた業績も存在する。

学術面での優れた研究業績として、人間・社会・自然の諸科学を著しく深化させ、権威ある賞を受賞したり、国内外の研究者や批評家に多大な影響を与えたと認められる研究業績をあげることができる(資料2-D)。これらの研究が教育学部・教育学研究科で実施されることにより、真の意味での学際的な教育研究活動の場が創出され、そこに学ぶ教員志望者や学校教諭は次世代に伝えるべき最先端の知や芸術に触れる機会を得ている。

また、文系を中心とした全学の大学院先導機構による拠点形成研究に参加し、他学部教員との共同研究を積極的に推進している(資料2-E)。多くの科学研究費補助金採択課題を含む本学部・研究科教員による研究は熊本大学における拠点形成研究の重要な一翼を担っている。

このように、教育学部・教育学研究科においては、社会、経済、文化面でも、学術面でも優れた研究業績が多数生み出されている。これらの研究業績はいずれも、教員養成に関わる高度な学術研究の中核としての機能を高めることを目指す本学部・研究科の目的にふさわしいものである。

## 資料 2 - A 「人と自然(自然系)の科学」に関する研究業績の判断基準

分科名 (細目番号)	数学(4101~4105)、地球惑星科学(4401~4407)	
区分	左記区分と判断した根拠	
	学術面	社会、経済、文化面
SS	<p>タイプA: 研究業績の掲載雑誌の Impact Factor(IF)が、付表に示す「SSの基準」を満たしている。</p> <p>タイプB: 研究業績の掲載雑誌の IF が、付表に示す「Sの基準」を満たし、かつ下記の条件の1つを満たしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学会・国際会議等において、当該業績に関わる招待講演、基調講演を行った。</li> <li>・当該業績が科学研究費補助金の基盤研究 A、あるいは基盤研究 S の採択に寄与した。</li> <li>・当該業績が、科学研究費補助金以外の学術的大型競争的資金(21世紀 COE プログラム拠点形成費補助金等)の採択に寄与した。</li> <li>・論文の被引用回数が20回以上である。</li> <li>・当該業績が、優秀な水準の学会賞・学術賞等の受賞に寄与した。</li> </ul> <p>タイプC: 当該業績が、学士院賞、卓越した水準の学会賞・学術賞・国際賞等の受賞に寄与した。</p>	<p>タイプH: 人と自然(自然系)分野で、知的財産権の創出及び実用化がなされており、その貢献が卓越している。</p> <p>タイプI: 研究成果(制作活動を含む)に関連して、国レベルの政策の立案・実施等に大きく貢献している。</p> <p>タイプJ: 研究成果(制作活動を含む)が国内のメジャーなメディア及び国外のメディアで報道された。または、研究成果が国外のメジャーな雑誌で特集記事として紹介された。</p> <p>タイプK: 研究成果(制作活動を含む)が、卓越した水準と認められる国外の賞や国内の賞の受賞に寄与した、あるいは国外展示会で招待展示された。</p>
S	<p>タイプD: 研究業績の掲載雑誌の IF が、付表に示す「Sの基準」を満たしている。</p> <p>タイプE: 研究業績の掲載雑誌が、付表に示す「Aの基準」を満たし、かつ下記の条件の1つを満たしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学会・国際会議等において、当該業績に関わる招待講演、基調講演を行った。</li> <li>・論文の被引用回数が20回以上である。</li> <li>・当該業績が、優秀な水準の学会賞・学術賞等の受賞に寄与した。</li> <li>・当該業績が国内外の学術誌等で紹介され、高い評価を受けた。</li> </ul> <p>タイプF: 論文の被引用回数が30回以上である。</p> <p>タイプG: ・当該業績が、科学研究費補助金の基盤研究 A、あるいは基盤研究 S の採択に寄与した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当該業績が、科学研究費補助金以外の学術的大型競争的資金(21世紀 COE プログラム拠点形成費補助金等)の採択に寄与した。</li> </ul>	<p>タイプL: 人と自然(自然系)分野で、知的財産権を創出し、その実用化を目指した試験が行われていることから、貢献が優秀である。</p> <p>タイプM: 研究成果(制作活動を含む)に関連して、地域おける政策の立案・実施等に大きく貢献している。</p> <p>タイプN: 研究成果(制作活動を含む)が国内のメジャーなメディアで報道された、あるいは、制作活動の成果が国内のメジャーな雑誌で特集記事として紹介された。</p> <p>タイプO: 業績が実用化研究に必要な大型の競争的外部資金の採択に寄与した。</p> <p>タイプP: 研究成果(制作活動を含む)が、国内の賞の受賞に寄与した、あるいは国内の展示会に招待展示された。あるいは、国内の設計競技等で最優秀作品に認定された。</p>

資料2-A 付表 「人と自然(自然系)の科学」の学術誌の水準判断における Impact Factor の下限値

系	分野	分科	細目番号	水準判断における Impact Factor (IF) の下限値		
				SS	S	A
総合新領域系	総合領域	情報学	1001～1011	10	5	2
		人間医工学	1301～1303	10	5	2
		科学教育・教育工学	1601～1602	5	2	1
	複合新領域	環境学	2001～2004	10	5	2
		ナノ・マイクロ科学	2101～2103	10	5	2
		社会・安全システム科学	2201～2202	10	5	2
理工系	数理系科学	数学	4101～4105	10	2	0.5
		天文学	4201	10	5	2
		物理学	4301～4306	10	5	2
		地球惑星科学	4401～4407	10	5	2
		プラズマ科学	4501	10	5	2
	化学	基礎化学	4601～4603	15	6	2
		複合化学	4701～4706	15	6	2
		材料化学	4801～4804	15	6	2
	工学	応用物理学・工学基礎	4901～4905	10	5	2
		機械工学	5001～5007	10	5	2
		電気電子工学	5101～5107	10	5	2
		土木工学	5201～5206	10	5	2
		建築学	5301～5304	10	5	2
		材料工学	5401～5406	10	5	2
		プロセス工学	5501～5504	15	6	2
総合工学		5601～5607	10	5	2	
生物系	生物学	基礎生物学	5701～5706	10	5	2
		生物科学	5801～5807	20	10	5
		人類学	5901～5902	10	5	2
	農学	農学	6001～6005	10	5	2
		農芸化学	6101～6105	10	5	2
		林学	6201～6202	10	5	2
		水産学	6301～6302	10	5	2
		農業工学	6501～6503	10	5	2
		境界農学	6701～6702	10	5	2
		追加条件	IFが無い場合にあつては、各研究領域において、特に優秀な水準と認められる学術誌を区分Aとする。特に優秀な水準と認められる学会誌を例示すると、次のようである。 ・機械工学分野においては、ASME級の論文誌。 ・土木工学分野にあつては、土木学会論文集。 ・建築学分野にあつては、建築学会論文集。			

## 資料 2 - B 「人と社会（社文系）の科学」に関する研究業績の判断基準

分科名 (細目番号)		健康・スポーツ科学(1401～1403)、生活科学(1501～1502) 哲学(2801～2806) 言語学(3001～3005)、心理学(3901～3904)、教育学(4001～4004)	
区分	左記区分と判断した根拠		
	学術面		社会、経済、文化面
SS	<p><b>タイプA：</b> 論文を掲載した学術誌、並びに学術的著作・作品の書評等を掲載した学術誌が、付表に示す「SSの基準」を満たしている。</p> <p><b>タイプB：</b> 同学術誌が、付表に示す「Sの基準」を満たし、かつ下記の条件の2つを満たしている。 ・学会・国際会議等において、当該業績に関わる招待講演、基調講演を行った。 ・当該業績が科学研究費補助金等の採択に寄与した。 ・論文の被引用回数が10回以上である。 ・学術的著作・作品にあっては、書評等において高く評価された。</p> <p><b>タイプC：</b> 同学術誌が、付表に示す「Aの基準」を満たし、かつ下記の条件の1つを満たしている。 ・論文の被引用回数が30回以上である。 ・学術的著作・作品にあっては、書評等が複数の学術誌に掲載され、いずれにおいても研究業績が特に高く評価された。</p> <p><b>タイプD：</b> 当該業績が、学士院賞、卓越した水準の学会賞・学術賞・国際賞等の受賞に寄与した。</p>	<p><b>タイプI：</b> 人と社会（社文系）に関係する分野において、当該業績の利用・普及状況や地域、産業界での応用・活用状況、政策への具体的な反映状況が卓越している。</p> <p><b>タイプJ：</b> 研究成果に関して国際的な賞、大臣表彰等による顕彰がなされている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディア及び国外のメディアで報道されている。</p> <p><b>タイプK：</b> 教科書・啓発書等が権威ある書評などに取り上げられている、長期にわたり広く利用されていることから、貢献が卓越している。</p> <p><b>タイプL：</b> 研究成果による貢献が卓越しており、国際的な賞、大臣表彰等による顕彰がなされている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディア及び国外のメディアで報道されている。</p>	
S	<p><b>タイプE：</b> 論文を掲載した学術誌、並びに学術的著作・作品の書評等を掲載した学術誌が、付表に示す「Sの基準」を満たしている。</p> <p><b>タイプF：</b> 同学術誌が、付表に示す「Aの基準」を満たし、かつ下記の条件の2つを満たしている。 ・学会・国際会議等において、当該業績に関わる招待講演、基調講演を行った。 ・当該業績が科学研究費補助金等の採択に寄与した。 ・論文の被引用回数が10回以上である。 ・学術的著作・作品にあっては、書評等において高く評価された。</p> <p><b>タイプG：</b> 同学術誌が、付表に示す「Bの基準」を満たし、かつ下記の条件の1つを満たしている。 ・論文の被引用回数が30回以上である。 ・学術的著作・作品にあっては、書評等が複数の学術誌に掲載され、いずれにおいても研究業績が特に高く評価された。</p> <p><b>タイプH：</b> 当該業績が、優秀な水準の学会賞・学術賞・国際賞等の受賞に寄与した。</p>	<p><b>タイプM：</b> 人と社会（社文系）に関係する分野において、当該業績の利用・普及状況や地域、産業界での応用・活用状況、政策への具体的な反映状況が優秀である。</p> <p><b>タイプN：</b> 研究成果が関係者から表彰されている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディアで報道されている、又は、実用化研究に必要な大型の競争的外部資金の獲得に寄与している。</p> <p><b>タイプO：</b> 教科書・啓発書等が権威ある書評などに取り上げられている、長期にわたり広く利用されていることから、貢献が優秀である。</p>	

資料 2 - B 付表 「人と社会(社文系)の科学」の学術誌の水準判断における Impact Factor の下限値

系	分野	分科	細目番号	学術誌の水準判断における Impact Factor (IF) の下限値			
				SS	S	A	B
総合新領域系	総合領域	健康・スポーツ科学	1401～1403	2.5	1.5	0.8	0.4
		生活科学	1501～1502	2.0	1.2	0.6	0.3
		科学教育・教育工学	1601～1602	1.5	0.8	0.4	0.2
		科学社会学・科学技術史	1701	1.0	0.6	0.3	0.15
		文化財科学	1801	2.0	1.2	0.6	0.3
	複合新領域	地理学	1901	2.0	1.2	0.6	0.3
		地域研究	2601	1.0	0.6	0.3	0.15
人文社会系	人文学	ジェンダー	2701	1.0	0.6	0.3	0.15
		哲学	2801～2806	1.0	0.6	0.3	0.15
		文学	2901～2903	1.0	0.6	0.3	0.15
		言語学	3001～3005	1.5	0.8	0.4	0.2
		史学	3101～3105	1.0	0.6	0.3	0.15
		人文地理学	3201	2.0	1.2	0.6	0.3
	社会科学	文化人類学	3301	1.0	0.6	0.3	0.15
		法学	3401～3407	3.0	1.8	1.0	0.5
		政治学	3501～3502	1.5	0.8	0.4	0.2
		経済学	3601～3607	2.0	1.2	0.6	0.3
		経営学	3701～3703	2.0	1.2	0.6	0.3
		社会学	3801～3802	2.0	1.2	0.6	0.3
		心理学	3901～3904	3.0	1.8	1.0	0.5
	教育学	4001～4004	1.5	0.8	0.4	0.2	
農学	農業経済学	6401	2.0	1.2	0.6	0.3	
「Bの基準」の追加条件	Impact Factorが無い場合にあつては、優秀な水準と認められる査読付き学術誌を区分Bとする。例えば、西日本哲学会等、査読体制の整った学会誌等。						
「Aの基準」の追加条件	Impact Factorが無い場合にあつては、各研究領域において、特に優秀な水準と認められる学術誌を区分Aとする。例えば、日本哲学会、日本倫理学会、日本臨床心理学会、日本国語教育学会、日本家政学会等、各研究領域において日本を代表する学会の機関誌等（公法研究、民商法雑誌、民事訴訟雑誌等を含む）。						
「Sの基準」の追加条件	例えば、Bioethics, Philosophy and Public Affairs等、著名な国際的学術誌。Impact Factorが無い場合にあつては、各研究領域において、卓越した水準と認められる学術誌を区分Sとする。						
「SSの基準」の追加条件	例えば、Journal of Philosophy, Ethics, Nature等、トップクラスの国際的学術誌。Impact Factorが無い場合にあつては、各研究領域において、国際的に定評のある学術誌を区分SSとする。						
学術的著作・作品の追加条件	学術的著作の書評及び作品の評価の学術誌への掲載については、新聞などでの書評・紹介・引用、学術書等の文献目録での記載、他者の研究史・学界動向論文等における言及を含む。						

## 資料 2 - C 社会、経済、文化面での寄与・貢献の状況

(出典：教育学部内調査に基づき作成)

GP		
水準	業績名	業績番号
SS	不登校の改善・解決に資する教育力の養成 - 大学院教育における系統的カリキュラムの創出と試行実践 - (教員養成 GP)	1008
SS	e! こころ学習プログラムの開発 - 教員志望のすべての学生にこころの健康一次予防力を養成する e-Learning Program の開発 - (現代 GP)	1009
文系		
水準	業績名	業績番号
S	教育者ラフカディオ・ハーンの研究	1005
理系		
水準	業績名	業績番号
S	算数・数学科における「本質的学習環境」の開発に関する生命論的研究	1011
スポーツ・芸術系		
水準	業績名	業績番号
SS	ソプラノ、ハープ、オーケストラのための「地上の平和」	1004
特別支援・養教系		
水準	業績名	業績番号
SS	日本の高校生における危険行動の実態及び危険行動間の関連	1001
S	スリランカにおけるインクルーシブ教育を組みこんだ初等中等教育教員養成モデルの構築	1013

## 資料 2 - D 学術面での寄与・貢献の状況 (出典：教育学部内調査に基づき作成)

文系		
水準	業績名	業績番号
S	生態学的自己の発達と障害に関する研究	1006
S	<対話> による説明的文章の学習指導 - メタ認知の内面化の理論的提案を中心に -	1010
理系		
水準	業績名	業績番号
S	若手研究者が読む『家政学原論』	1002
S	曲面の鋭角三角形分割	1014
SS	阿蘇火山における更新世紀末期、AT 火山灰以降のテラ層序	1015
スポーツ・芸術系		
水準	業績名	業績番号
SS	黒柿拭漆象嵌箱	1003
SS	蠱惑の世界 04-11	1007
特別支援・養教系		
水準	業績名	業績番号
S	特別支援教育を担う教師のトレーニングプログラム開発に関する研究	1012

## 資料 2 - E 大学院先導機構における拠点形成研究による優れた研究業績

(出典：研究推進会議資料を基に作成)

題目等	寄与・貢献の状況
世界的文化資源集積と文化資源科学の構築 (拠点形成研究 B)	本学部・研究科教員による「中世ブリティッシュ・ヒストリーの可能性と射程」(基盤(B))、「日本中世生業史の研究 「農業/非農業」の二項対立論を超えて」(基盤(C))、「清代中央官制の研究 内閣-翰林院・都察院を中心として」(基盤(C))、「鎌倉時代の古記録に於ける記録語・記録語法の研究」(基盤(C))は、拠点形成研究の重要な一翼を担っている。
脱近代社会の秩序形成の原理と政策に関する研究 (拠点形成研究 B)	本学部・研究科教員による水俣地域に関する社会学的研究は、拠点形成研究の重要な一翼を担っている。
生命倫理を中心とする現代社会研究(拠点形成研究 B)	本学部・研究科教員による「生命誕生をめぐる「語り」と道徳的思考 「不当な生」とその周辺事例を中心に」(萌芽研究)は拠点形成研究の重要な一翼を担っている。また、同教員は、拠点リーダー(社会文化科学研究科)と共同で『熊本大学生命倫理論集 2』(九州大学出版会 2008 年)の編集・刊行に携わった。

## 資料 2 - F 年度別 SS 判定と S 判定件数(出典：教育学部内調査に基づき作成)

年度	教員総数 (人)	SS 判定件数			S 判定件数			SS と S の 合計件数
		学術的 意義	社会、経 済、文化 的意義	計	学術的 意義	社会、経 済、文化 的意義	計	
16	107	1	0	1	2	1	3	4
17	108	1	1	2	1	0	1	3
18	108	0	1	1	2	1	3	4
19	105	1	2	3	0	1	1	4
合計		3	4	7	5	3	8	15

## (2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る

(判断理由)

第一に、二つの GP が採択・実施され、不登校の改善・解決に資する教育力を養成する類例のない独自の大学院カリキュラムや、「心の健康に関する一次予防力」をすべての教員志望者に習得させるための斬新な e-Learning Program が開発・運用されるとともに、広い範囲の教育関係者に対し極めて有益な情報提供が行われている。

第二に、従来から優位性のある教科教育に関する研究の中でも、「＜対話＞による説明的文章の学習指導：メタ認知の内面化の理論提案を通して」や、「算数・数学：授業改革から教育改革へ」などの研究成果は、そのユニークな指導方法の提案等により、学校教育の現場に大きな影響を与えている。

第三に、学術面で新局面を切り開いた研究業績として、「リーマン幾何と離散幾何との関連の最小性の観点からの研究」のように国際的に評価の高い研究業績が存在する一方、作品「蠱惑の世界 04-11」や作品「黒柿拭漆象嵌箱」のように、国際的・全国的規模の公募展で「大臣賞」や「長官賞」を獲得した作品もある。

第四に、社会からの要請が強い領域での卓抜な研究業績として、「特別支援教育を担う教師のトレーニングプログラム開発に関する研究」や「阿蘇火山中岳火口付近の有史における火山災害と噴火様式の実態解明」がある。また、「地球の裏側から夜空を！初の海外インターネット天文台により変わる日本の理科教育」は IT 時代の理科教育に資するユニークな業績である。

以上のことから、本学教育学部・教育学研究科における研究成果の状況は、期待される水準を上回るものと判断される。

## 質の向上度の判断

事例1 「学際的な教育研究の場の創出による教員養成及び学校教育が抱える諸課題の改善・解決に向けた研究の推進」(分析項目、 )

(質の向上があったと判断する取組)

不登校の改善・解決に取り組む研究「不登校の改善・解決に資する教育力の養成」(表・1008)は、熊本市教育委員会等と連携して取り組んできた不登校支援活動の実績を背景とした実践研究であり、本研究によって創出された試行カリキュラムは、臨床心理学、医療臨床学等の専門理論に基づく「不登校理論プログラム」と、不登校児童生徒の「情動」「行動」「認知」の三側面に対して「鑑賞教育(美術教育)」「運動実践(体育教育)」「ものづくり教育(技術教育)」の視点から能動的な働きかけを行うべく設定された「総合実地研修プログラム」から構成されている。本研究は、総合大学の特性を活かして医学部の協力を得、同時に教育学部の特性である地域との密接な関係を活かして地域の不登校支援施設の協力を得ることによって、前例のない学際的・広域的な活動を展開することになった(資料3-A)。

以上により、「学際的な教育研究の場を創出することにより、学校教育及び地域社会の発展に寄与する」という研究目的に照らして、研究の質は大きく改善、向上している。

資料3-A 「大学・大学院における教員養成推進プログラム(教員養成GP)不登校の改善・解決に資する教育力の養成」報告書



事例 2 「教員養成に資する現代的・先端的な教育方法の開発研究の進展」  
 (分析項目、 )

(質の向上があったと判断する取組)

学校教諭を目指す全ての学生に「心の健康に関する一次予防力」を修得させる e-Learning Program の開発を目的として、現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)「eI ころころ学習プログラムの開発 - 教員志望のすべての学生にころころの健康一次予防力を養成する e-Learning Program の開発 - 」(表・1009)を推進した。

e-Learning の特性を活かし、メディアを活用したイメージトレーニング、シミュレーション、電子ポートフォリオによる省察などをインターネット上で大規模に展開するシステムを構築し、「ころころからだの健康教育」「子どものためのストレスマネジメント教育」等の授業実践を計画的に実施した。この結果、「一次予防力」、すなわち教育現場で子どもの異変に気付き、初期対応や専門家との連携を行わねばならない学校教諭にとって必要不可欠な実践力の向上が期待されている(資料 3 - B)。

以上により、本学部の現代的な教育方法の開発研究の質は大きく改善、向上している。

資料 3 - B 平成 18 年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム「eI ころころ学習プログラムの開発」報告書



事例3 「学習指導理論や学習環境等の学校現場に直結した研究の進展」

(分析項目、 )

(質の向上があったと判断する取組)

「<対話>による説明的文章の学習指導：メタ認知の内面化の理論提案を通して」(表・1010)は、メタ認知の視点から説明的文章の学習指導に取組み、国語科教育の分野で斬新な指導方法を開拓した。学校教諭から講演・指導助言の依頼が多数寄せられるなど、その効果・影響力は非常に大きい(資料3-C)。また、「算数・数学科における「本質的学習環境」の開発に関する生命論的研究」(表・1011)は、児童・生徒が主体的に算数・数学を学ぶことができる「本質的学習環境」の開発を目指し、理論面・実践面の研究を深化させている。研究成果は著書『算数・数学：授業改革から教育改革へ』や『数の石垣』により、学校教諭に対し広く提供されている。学校教諭から講演・指導助言の依頼が多数寄せられるなど反響は大きく、その効果・影響力は甚大である。

以上により、学校現場に直結した理論的・実践的研究の質は大きく向上している。

資料3-C 『<対話>による説明的文章の学習指導：メタ認知の内面化の理論提案を通して』に関するワークショップ、シンポジウムの開催内容

(出典：教育学部内調査に基づき作成)

年度	寄与・貢献の概要	対象
16	熊本県小学校国語教育研究会2学期例会講話 荒尾市総合文化センター 熊本県小学校国語教育研究大会シンポジウム 八代市 合志町合志小学校文部科学省学力向上フロンティア指定校発表会シンポジウム	熊本県教諭 熊本県教諭 熊本県教諭
17	鹿本郡中学校国語部会講話 熊本市中学校国語教育研究部会講話 「自らの言語生活を拓く国語科授業のあり方～領域の特性を生かして確実に力をつける評価と指導～」 言語教育研究会ワークショップ講師 熊本県小学校国語科教育研究大会講話 大津町立大津北小学校研究大会講話 平成16.17年度 菊池郡市教育委員会連絡協議会指定 学力向上研究発表会… 確かな学力を身につけ、生き生きと活動する児童の育成を目指して～主体的な学習活動の工夫を通して～「確かな学力を身につけ、生き生きと活動する児童を育てる」 読売新聞教育ルネサンスシンポジウム 対話型授業の取組 九州大学 丸野俊一 ほか NPO法人言語研究会講演(東京) 熊本市教育センター講演 伝え合う力の育成 日本国語教育学会全国大会公開授業(日比谷公会堂) 熊本市国語教育研究会合宿研究会講演及び指導助言 熊本県小学校国語教育研究会講演 個性化教育研究会山口支部研究大会講演 熊本大学教育学部附属小学校研究発表会シンポジウム参加 佐賀県高等学校教育研究会講演 菊池郡市教科等研究会 小学校国語部会講話	鹿本郡教諭 熊本市教諭 福岡市教諭 熊本県教諭 熊本県教諭 福岡県一般 東京都教諭 熊本市 国語科教育 熊本市教諭 熊本県教諭 山口市教諭 九州各県教諭 佐賀県教諭 熊本県教諭

	<p>これからの国語教育～国語力の育成における国語科指導の役割～</p> <p>植木町研究会研修会講演 「確かな学力」の育成～基礎的・基本的な内容の確実な定着を図りながら自ら学び、自ら考え、表現する力の育成を目指して～</p> <p>名古屋市教育研究員講話</p> <p>自分の考えを作り出す子を育てる物語文の学習</p> <p>津奈木町小中合同研究会講話</p> <p>熊本市中学校国語教育研究会夏季合宿研修会講話</p> <p>学び合う授業づくりについてシンポジウムとして参加</p> <p>九州大学丸野俊一研究室主催</p> <p>後援：福岡県教育委員会、福岡市教育委員会</p> <p>文部科学省</p> <p>山口県周南市立秋月小学校校内授業研究会講話</p> <p>熊本県小学校国語教育研究会二学期例会講話</p> <p>これからの読解力育成へ向けての教材研究と授業づくり</p> <p>熊本市教育センター研究員へ向けての講話</p> <p>研究するということ</p> <p>大学と連携した接続期の研究 熊本県教育委員会主催 合志市中部保育園・合志小学校研究発表会講演</p> <p>幼保小のつなぎを重視したコミュニケーション能力の育成</p> <p>未来にかがやく肥後っ子のために 熊本県教育委員会主催 幼小連携 ことばでつなごう ワークショップ</p> <p>熊本県教育センター10年研修講話</p> <p>読書活動の推進</p>	<p>熊本県教諭</p> <p>名古屋市教諭</p> <p>熊本県教諭</p> <p>津奈木町小中教諭</p> <p>熊本市教諭</p> <p>福岡県教諭</p> <p>周南市教諭</p> <p>熊本県教諭</p> <p>熊本市教諭</p> <p>熊本県教諭</p> <p>熊本県教諭</p> <p>熊本県教諭</p>
--	---	---

事例4 「多様な教育的課題に関する創造的な学術研究の積極的な推進」

(分析項目、 )

(質の向上があったと判断する取組)

「特別支援教育を担う教師のトレーニングプログラムの開発に関する研究」(表・1012)により「特別支援教育の動向と支援の可能性」、「広汎性発達障害者に対する心理的援助」、「行動コンサルテーションの内容と指導方法に関する研究」等、多くの個別研究が展開され、特別支援教育を担う教師のトレーニングプログラムが開発された。研究成果は公開され、学校教諭から講演・指導助言の依頼が多数寄せられるなど浸透力は多大であり、その効果が非常に期待されている。

以上により、「多様な教育的課題に関する創造的な学術研究を積極的に推進する」という本学部・研究科の研究目的に照らして、研究の質は大きく改善、向上している。

事例5 「人間・社会・自然の諸科学の深化による創造的な学術研究の推進」  
(分析項目、 )

(質の向上があったと判断する取組)

作品「黒柿拭漆象嵌箱」(表・1003)は、人間・社会・自然の諸科学を深化させ、「造形感覚と卓越した技術がうかがえる優品」と高く評価され、文化庁長官賞を受賞している(資料3-D)。また、作品「蠱惑の世界」(表・1007)は国際的公募展で経済産業大臣賞を受賞した。このような研究が教育学部・教育学研究科で実施されることにより、真の意味での創造的な教育研究活動の場が創出され、そこに学ぶ教員志望者や学校教諭は次世代に伝えるべき最先端の伝統・芸術に触れる機会を得ている。

以上により、「創造的な学術研究を積極的に推進する」という本学部・研究科の研究目的に照らして、研究の質は大きく改善、向上している。

資料3-D NIHON KOGEIKAI 第11回 伝統工芸 木竹展 入賞作品解説  
(出典：教育学部内調査に基づき作成)

5-00053-005-011-00033



文化庁長官賞  
くろがきふきうるしぞうがんばんこ  
黒柿拭漆象嵌箱

箱の表面の流れる文様と交差する線彫りは絶妙な効果で、端正で調和のとれた作品となった。筋状で丸みを帯びた彫刻、程良い拭漆による表面仕上げ、さりげない象嵌と配慮された要所は一体となり、格調高く織りなす綾のリズムは観る者の心に快く伝わる。素材の特長を生かし、造形感覚と卓越した技術がうかがえる優品である。

(第11回 伝統工芸 木竹展図録より)